

玄峰集

911.3

ケ



かくも形く集るともなく机上  
よに書けりいふまじりて菴山  
の死後うたふひとりにれを  
例の作川  
信ひよりあまし  
いふさかぬか  
せんしとて  
玄家集ともの

あらわれぬ

佛傳記卷之五 房州里之末の事

古歌ニ靴の子れ子の子の子よそし山嶽乃櫛の火げりて飛之と

○火げり本のおきやう○けたてあるらんたさ音通す

又國柄の謡よはふよふハハ川くき者そとよ誦らうせきを

いさハ孫ありきあり年く谷くすう出合てあのうら

せきくをうちあひ

○晋王濟乘馬不肯渡水曰馬必惜連乾泥障去之乃渡

李白○紫駟行且嘶雙翻碧玉蹄臨流不肯渡似金

白雲関山遠黃雲海成迷揮鞭萬里去安得念香泥障

津小天王寺アタリアアアの系ト云松系のゆきまオオ子ト五家ト

折フシヨニラレテ弟子寂寂ワラハ命松丸ヲ具シテヲ子ニシカ食

カリケレハ常ノ産ナケレハ過シカクシトテ遊ヤウノ物ヲコシラヘテ

京ニ高々ル双ノ国ノ林鹿長泉寺曳春菴ノ作ニシハ

# 玄峰集春之部

## 改上

日海波魚のまき一耳あぶのまき

えのややくくくくくくくくくくく

えりやえりて雀のおのり

手まじりてりてまじりの鹿目バ

西一の鴨もはたあやまのまき

この朝之夕之をとりてんてん

今終末の具障しありたる有様と云  
若ふよ知り恵の障とて度々しや

五十五にて山谷を又くつとてのま

口新玉のつるし泥障はみむま

初分るや馬ものすゝ牛の歌

標モトの世阿弥まつるやまきの障

惟モト花と記しよまゝなる二りうわ

けいひの障りたりあさかきと人の身て  
たごもくみくくすれとらや

世阿弥の祖  
世阿弥の祖  
世阿弥の祖  
世阿弥の祖  
世阿弥の祖  
世阿弥の祖  
世阿弥の祖  
世阿弥の祖  
世阿弥の祖  
世阿弥の祖

若菜七ばうひを刈る詞

七葉をとて厚んくつさよ首礼

ぬれ極や芥子にけり土なう

云ぬる若菜よちるよふまゝ若菜ちる

憶翁之客中

祐折て若菜もつとちん若菜花

若菜

若菜あちりてくちん若菜花

若菜摘水師  
法再提海  
達多品  
採果汲水  
拾新説  
食

一 凡海て石よすうけし 芥舟の角

歌云々

何りくも 吟詠 摘みくは 又ゆゆ

ウツルコ

四五七

あつたのま  
移りのま  
めさだま  
のうまのま  
みまのま

源一 源一 源一 源一 源一 源一 源一 源一 源一 源一

心りくも 吟詠 のめねといさう

まふふも 吟詠 初子のま

ウツルコ

まふふも 吟詠 初子のま

まふふも 吟詠 初子のま

村すめ

まふふも 吟詠 初子のま

ウツルコ

まふふも 吟詠 初子のま

まふふも 吟詠 初子のま

まふふも 吟詠 初子のま

将月山とて物ねめ望る月夜を

臥龍梅

白さ其龍をもつしや梅のよ

在柄天神奉納

今更のり  
中んまね  
としか  
しけ  
候世

斗の梅くけらされ流る那

小とよ一字

ふのゆらぬ少中と梅の本ゆ

梅ちや上迷のるるし柳

相るのゆ一京くらまなりとて生ぬり

うく其光んちるく知る人いそこくは

みちのちとしかしといふくたてと

くさる川舟のよれ吾清りこの

くさるぬほとよゆりまをまいふれと

いとる海ねく

梅よさしるおまをりるまきまの

あのみまもやけしきまのやち

番椒食之  
有微香  
能進食

さねのうきを味へたりて

この梅も遠く月のほひの

梅子ちやえとつてなると梅のま

棧

張りかき目しりとも是れを

柳

目新く枝つてはるや柳のま

中洲の藤原

太平記佐木塩治判官高貞戴るラ月毛三封り

○安於恭親馬場殿ニライテ龍馬ニ付テ直諫ヲ奉

ハ清明世ヲ孫術教ヲ習フ占ヲ

云フ堂子ヲ

指シ如ク

稱シテ

サス神事

呼フ

鏡古ヲ洗

一に風れ柳もさすの神子

まのあゝ秋の本葉も柳籠

影をうけ

正月しれらゝとてと難をう

一ト陰のあゝさそあゝん南郊難

せりるまきカハ庵よろゝ他独活

萩のさきほふちて人の詠えぬ  
物決りの花<sup>ナリ</sup>ちよるてしこひひのち  
まきさくまきや火燈のふちを花を  
春風北風をとり切られぬ  
けふは川人ちよかき、穩之るは嘴を  
たぐさるてかくすれとや

おんちのよりりて  
ちれて恋物に伽羅焼てくれり

燕

若者よりて若人よりと燕のね  
柳よハふあてにのれけ風の夕つを

改定隣人ききるはPつのはりきり  
は夕ア朝踏るくらぬはなをり  
行脚惟ねくちおくりゆを

本の枝よちよりてあやれ中

陸合

水  
一変  
不佳意











善化ハ臨濟ノ弟子善翁と臨濟ニテソフルニ然子ハ法海録行録ニ師使テ唱テ曰

許多ノ赤子色意ハ何ハ善化の師善子ハ臨濟の怨子

在テ這裡

什麼様

トアレモシ

襖ノ誤ニヤ

盤亦作祝

小盃之飯盤ト

アレハ然ラ

然トセラルルシ

同周ニ善化常ニ於街市搖鈴云

明頭未ヤ明頭也

暗頭未ヤ暗頭也

四方ハ面

未ヤ旋風也

虚空未ヤ連架也

連架ハ轂ヲ

打擲ニカラサ同ト云ルヲモオト

亡

記

又ソレト云ルニト大悲心ハ并吟ムヨク

中陰回向

之る代々ノ白ひゆりて世のや

茶のとりや坊々灰まぐ果ハみな

三七白

さるつら又つづいて法の

義士ト云

山ふまされ夢をも空橋の隙むら

夢のあり

ことなき

玄峰集其之部

更衣

培多矢の葛はすりなり衣之  
綿ハ那キ子 袴ハ那キと 袴ハ那  
すすすす 信又うう 白重

詞之ありぬ

老也と川とをそとありて夜も  
侍影山の社跡よりと清きと

目 空ハ雲入 雨影のそきぬ 時多  
目 車とときたるく 利体の為十

原亦より母

節いりそきなり それハ時多  
ほもきん<sup>ツツカシ</sup>里さひ燦るつ比  
御成節いころのゆをほとま

まき巻

五位六位名二二子海也よまきすれ

原氏名 第一  
又七三 四四位  
五位  
出

雨多

藤原  
孫  
牡丹

雨多を月のおもきんあまきん  
部りふぬうた道りかつ久

伊勢法樂

しろくハ松松こくりハ

降帳の勢世とるよの戸ヤ子規

乃ちそゆとまひしけし 郭云

河うくわさしこく山の晴多

白氏  
蘭省花時  
錦帳下  
唐山夜雨  
草菴中  
郭云

梅

る祝すはまの根竹る

斜さる比賣行てゆき 霍公

卯花

あしるく鬼こまぬさ卯木

斎

擦賣あな卯れさの飯とつる

川男や格と洞える夜中樂

鍾の偈ハまこりこりてぬり

お松子

樂名

け三句ハ変ろ子追返しの以るくこそ

# 牡丹

大瑞地ニ系  
唐土ヨナルカ  
如シ齒ニカハ  
取ルノミ

土<sup>ナメ</sup>當耳てそにかむ教のほしん  
くろ<sup>シ</sup>淵をそとくく牡丹の  
古<sup>ナメ</sup>庭よあこましくもらん

# 春の嵐

春<sup>ナメ</sup>河しーさる時や苗の色

義仲寺師父之廟

寂蓮

春<sup>ナメ</sup>丹<sup>ナメ</sup>イ

奈良の  
祠の作り

新樹  
若<sup>ナメ</sup>葉ふくらんやあてこの刻  
先<sup>ナメ</sup>火<sup>ナメ</sup>踏<sup>ナメ</sup>を<sup>ナメ</sup>何<sup>ナメ</sup>く<sup>ナメ</sup>新樹の烟

# 懐旧

か<sup>ナメ</sup>し<sup>ナメ</sup>ひ<sup>ナメ</sup>く<sup>ナメ</sup>る<sup>ナメ</sup>秋<sup>ナメ</sup>の<sup>ナメ</sup>さ<sup>ナメ</sup>る<sup>ナメ</sup>も<sup>ナメ</sup>若<sup>ナメ</sup>相

清<sup>ナメ</sup>田<sup>ナメ</sup>の<sup>ナメ</sup>岩<sup>ナメ</sup>と<sup>ナメ</sup>或<sup>ナメ</sup>傍<sup>ナメ</sup>を<sup>ナメ</sup>と<sup>ナメ</sup>よ

やす<sup>ナメ</sup>き<sup>ナメ</sup>旅<sup>ナメ</sup>を<sup>ナメ</sup>人<sup>ナメ</sup>と<sup>ナメ</sup>教<sup>ナメ</sup>へ<sup>ナメ</sup>よ<sup>ナメ</sup>か<sup>ナメ</sup>ふ<sup>ナメ</sup>つ<sup>ナメ</sup>て



悼 流亡妻

このもろ又妻あなまきせしのチか子つち

蝸牛

まろつちや角よ目ととら 蝸牛

坂車のおろよとすうらうらと 推本つこころ

火と死やの隅よ貝屋と太刀の俵よほ

アとけらまをりも持つこころなやあ

とつらよのまこれハ妻のなかりまてかむ

かしの兵貝もあなまかゆはとら

まよとらうらとけ

ちののくーと言ひてせんや古貝と

万葉 大津の歌よめて

あらしさひと土袋よはせとるやまあ花

大津の梅さ入ま糸のうあまう 越えれ

けもを竹為こころかりくまひれハ

あらしさるこころや物の上とちるは

万葉 習 夫よあれハけよ  
あらしさひと  
中花  
詠可あれハ花のまきこころ





歌よつゝ級粒暎よあ〜く〜り

習生

才よれ〜る 裾〜 暎の折よ〜

歌よ〜る

それよ〜く 歌よ〜る や 金の茶

後帝<sup>不坊の</sup> 倭帝<sup>不坊の</sup> 唐の改詩人を吟よて 梳

益田又宿 眼<sup>益田又宿</sup> 益田又宿 斗よて 度て 柳よ 似〜

又三形<sup>又三形</sup> 益田又宿 斗よて 度て 柳よ 似〜



十石代りり家くささくねんたす  
うよ今もそりあや

川舟のさ、一付もさるるも

ハ幡を而替

佛堂関白殿御物立より義家朝臣系

公義の時南都より早瓜をすよ情士毒

象るまこと尸家に依つて瓜と別たす毒丸出

瓜切てさひぬ釘のちんのや

妻女驩諧文アリ略

ナ刑のよほききりーア旅うりて

確系アーまことんよまは人かさくた文ま

ふんをせえねも致し証物の情もたれ

人よ折折の口もささしきいんひ

そくまうしもにくまもひひもつま

先んは一證もいひゆりぬらひん

宿執のつきらあ、旧跡あれたまえ、ゆりて

Dr. J. M. D. ...

... ..

... ..

山

... ..

冰花 ... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

... ..

夢に葉は穂又じよとぬせんの時つわ

村さよのこふく之をみしつれけれ

ありと日れ臨みちきよあをくけり

ニ母と夢つらん

ありと園よふか善中や母を

伏見橋本所

いひま川あつそわらもけいせ

さるものちんた

行燃てまうおおるおかりる

お頭をらん

ニ光のま十ラニセ夕ノニラ生カ  
セ夕ノ夕十ラニカ

堂に花をい入あやニツ目

あて女あかくてさるる葉飯あ

三河風月寺

一とものあひをさるる山飯あ

丹波歌

塔ろくやまをさるるこここ

六本下りよきて

江戸麻布ナリ

下園や地ぢなうしれ  
やの  
何さかうし  
たるよ  
し  
やの

柳知山

若やの  
外深  
よ  
人集  
り  
人  
の色  
交の  
り  
よ  
嫩  
き  
結  
の  
こ  
や  
う  
な  
お  
の  
こ  
う  
た  
ふ  
と  
う  
さ  
ら  
さ  
ら  
若  
う  
柳

江の路

夏の日や  
さめて  
山  
座  
の  
い  
ま  
ひ  
ら  
そ  
そ  
な  
て  
り  
ま  
て

旅  
費  
の  
糸  
相  
よ  
さ  
い  
く  
や  
ゆ  
か  
ら  
の  
お  
も  
う  
ら  
か  
い  
よ  
ん  
ま

能くさき

汗ぬく  
ひ  
少  
ね  
よ  
そ  
う  
て  
沖  
津  
風  
稻  
村  
う  
遠  
と  
さ  
ら  
よ  
本  
陰  
と  
も  
な  
ま  
き  
砂  
の  
よ  
よ  
逸  
父  
の  
こ  
そ  
う  
て  
已  
ら  
な  
こ  
と  
さ  
ら  
お  
と  
さ  
る  
流  
り  
お  
け  
て  
ひ  
う  
ら  
も  
若  
う  
海  
の  
上

其うゝ家の向かひの麦の穂と合子あふ  
こころの如く振ひて打らるるさうらふあをふて  
こころの子にさうよとかくもん道明寺  
ちのちにはゆりゆりしとぢもくさたさうて  
うしろさうらふれいさうしれさうよさうあて  
川さうのさうのさうらふさうらふさうらふ  
あはれとせむ民あめの門よあま根あを  
後あうて五天さうさうさうくたたまさうら

さうえすたなくゆりく肥て未業さうて  
階師のせすもてのあえさうあさうさうて  
さうさう西のさうさうねとさうさう  
あはれ松さうのかさうさうかさうさうのさうさう  
ゆりあのさうさう  
さうにあさうさうさうせすねの松の陰

納涼

あにあさうさうさうあひの涼さうあ

あなをのまろくもしめて

すしきや心ふしゆるあのを心

かくるゑの涼

まゝあれりあはふよしとて代

埋火を涼とあはくお的なる

三摺神と  
アリ

一種堂敷として芳ゆく甲よりくゆそ

味あすうすすしーまゝ新コトの涼うま

祇園の會のせりの降下るのせ山鏡より

錦より足をとるなるお秋聖いうおー松尾

まろしーもふ袍よた刀をきてやあさる

今の世に床儿を居きと下の競式みる

ーさゆまて紅の記さけくる陰禱うい

ろみかもんの上下をあくるおりお足深の梅

ふよにふよおて粧ひとつらぬひ遊草を

いすしひあて定められたるここの園を

改之くは威儀者さるる中る月こと

何事車に積りて所毎に月か何の用よ  
うゆるまきん

たて何しとことと踊るや祇園のま

らんをやうの和印さなまきや汗ぬき

清水何き方解

校うりな何れはまのにまき

目黒の能し人のまよてぬる

庭一み川心の産そま川く

席令佐海らまきゆりてまき大和

活弁て和弦のたま川行んとまき

神奈川の産の清きまきとまき

紀伊聖年の清きまき梅酒よ回るまき

すくくめてまきまてまき山清き

は平の巻

夕之ま様子のまきまき片ひき

歌まき

世ヲ行テ山ニ  
入ラン山ニテモ  
狂ウキハ  
いつちれん

焼  
てまきの  
お墨こ

すくろくろくおまのまてに及及を  
る烟よわくくくく名穂のま  
切味ありのひろくふさや及ゆ  
ささの葉ままつのほろく義仲菫、  
るのゆりまらよるをふ奔せられけれハ  
信持まで拂ひ果りく及のま  
移洗の役まよ  
くくまのあつたる徳利る

逢  
眼  
恋

かきや口しすのまぬまを灯  
牛婦はうれて抱ふれとよの人や  
初まん清くそ一人移んま

ど  
ぎまの  
和中はまや  
行松ノウ  
可生

佛  
後

今日の日は東木の隅より出て西木の  
よたさする長日短おの頂上より

此國の法をよめるまじくもきこひ  
日の御をよめるまじくもきこひ  
いとよみよみよみよみよみよみよ  
御よみよみよみよみよみよ  
いとよみの御よみよみよみよ  
よみよみよみよみよみよみよ

玄崎集秋之部

初秋

アツシキヤニテモアルニ  
あはれ多きみよみよみよみよ  
うよみよみよみよみよみよ

秋風北ふくろきよ強すれ  
つくりよの糸をよみよみよみよ  
流あのはきよいろうあきれ風

閑居

夜ふきよとよみよみよみよみよ

る句

上園のあそびありきもの葉の葉の表

宗祇の廟 能根湯がアリ

石塔とてなるといふ一葉の丸

市井

盆まきハ船を門の竹菴の丸

七夕

まゝ夜よとくまかりたる天の川

布の巻に糸の妹とていふはめ布

舟のあひや教目せし影ひの糸とて

大伽藍のまきとていふは糸の糸

日をきくおとす糸の糸とていふは糸の糸

の間に糸の糸とていふは糸の糸

はちとていふは糸の糸とていふは糸の糸

上野の糸とていふは糸の糸

流る糸の糸とていふは糸の糸

糸月の糸の糸とていふは糸の糸

和州吉野  
アリ所  
依是作

セシヤを後と所のわのしきせえん  
セ夕やか長川にさるる 牛車

防鴨河使

書致や人目つみのはつる

梶の葉糸に小くく書とそ

家やまぬひとあし京天の川

重後るえや保田川糸の橋柵

季候り  
セ夕に古  
保田川橋  
アリス云  
えやハソキ  
のえやハソキ

さしあしあし水夕を流ふ天れ川

をさす并せんえとれ 磯 鷺いもの坊のら

花さるるあ田すいれおれ風梅立てる

さしあしあし水夕を流ふ天れ川

秋風のくしるをぬくさ花のぬ

二溥新のくしるをぬくさ花のぬ

● 送ん送甲の津さくくくるい所をさ

底倉本香あしの湯を絶て地獄を

くうとふとありあしてはさの湿化蝶蜻

の類をききしめしむる事

たのれまき候名に似たるまきり候

五歌

葉のまふもあひあけよまきのま

すしき

むすき候まつきらるゝにきり

石川ノ二里の体ハあまら

聖のし

おとしろくしあまきすこふまか

まの秋まふあひあくわらふ

盆のしとまおもか影しこまは様

洗

浴らせてあじくにこそたれのた

虫

きり

たけの聖阿しつなまきり候

い書虫のきくも方々よまのき 篇

よのよゆきて

何と云もなり 縮ららるて冬重バ

あふ破 泥

馬草破あき流のねはまもくくろくさる

の夕へいよく夏 月信方のかこもい

くそ園取にる集もさそ折はみのく

つちえくくのまーさーらるー

検校 多負傷 大黒 小くら ころのこ

早々の 小やと花

三代目とのんこと子の母とこを推ぬ

うきい意味あれ柳てあそくゆん

おりのまんとしつらん 悪草あ破

まあ  
あのみあゆみのまあ  
まの申のおえん  
うらむん  
あまのまの  
連うきと  
まをとうり  
まをとうり  
まをとうり  
まをとうり

うきい 柳 取

稲妻ふけーの種まの目しやま

鱈取

う〜交れらるるひや葉取鱈取

味つらて老を喰ひてし鱈取

鱈取ハヒでよたまはさし鱈取の卵

おぼろもさうよ

蓮のうたのふれいとむしうそしされ

田一田ん

まふくひき〜めく〜一田ん

里右の娘〜るひ〜よま

名町のさくらわつしと歌きとる

西瓜

からとら〜とてあ〜る西瓜

書悔

尸の柳枯板〜るお〜な〜

サ達の寄りあ〜れは〜女〜れ尸

白鱈取を  
味將曲に老  
食つ治腹中  
本細見ユ

〇鱈の庄  
さし香名

新〜まのウ作り  
昔又のウナリ

Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header.

Handwritten text in the upper middle section.

Handwritten text in the middle section.

Handwritten text in the lower middle section.

Handwritten text in the lower section.

Handwritten text in the lower section.

Handwritten text in the lower section.

Handwritten text at the bottom of the page.

Vertical handwritten notes on the right margin, including the characters '木' (wood) and '木' (wood).



Handwritten text at the bottom right corner.

西を羊七戒各出高 飛鳥 舞子 送 縁又 子ふ 今も 阿ま さい  
ミノヤ三勝といふ 女  
とニ自害  
セントカヤ

と彫入るる時をすまきとてうねとお  
いかにひるひさしをくむれば  
羨ましく思はるるまゝお羨ましく  
おら

松ヶ崎の妙法のみ

船をたぐしたのさしとてや船の風  
舟冬さるるさむるの船の夕へお  
舟の夕へお

草折言上人之山石堂 念行入す

五親祖  
雲陵石堂  
相傳飛鳥  
飛鳳而

遠のかくさるるありあくのこ

らの歌

りとおくむは土のぬくも初めし  
江のさのうらむららむ船のさ  
さるる園の政生をねえにそはる  
の月をけてちのちのやうにゆい  
柴の笛はおすくくれぬぬれ

新嘉の年のる絶くは御主人の  
しつとる社傍を以てたむひきせ  
神のいあまの教をさるるは階下を  
つまずく木の丸もたすもさあ

舊柳子送てらふことのゆるせ田の

月

名りや柳の枝もそくく  
名りや烟言ひもくあのみ

猿 泊

後子九このはあをくくし  
御あへ

猿矢之空るは三きとくあを

仕合るは虫のねくまの月

まきやまのねと書きたりくあ月

荒れ新ぬ改まると戸をそとをねて葉

飯の根サ務とする一客あり

名りハ降しおあこの木く水

名りやせんこさうしてまきまをく

名月やせき  
かき  
家の名  
サキ

阿比山も坊をこゝろりすの月

清涼は案をのあつたてつり

みかたれうらやみ

新りや内侍ふの標のまよ

ひららの陸隆今の細松江の鏡籠

あつたての屋を垣板をうらやみ

の路おちうきにのしれものまよ

はよれまなくれさもあれしとの

去月なるらんやうり

あつたてしてすまのまよの月

あつたてや新人の世のまよさうり

まよあつたてのまよさうりの月

あつたての園を坊はあつたての月

あつたてのまよさうりの月

隆今大佛

あつたてのまよさうりの月

万葉  
野田の  
新王の  
まよ  
男ハ桂男の  
まよ  
新王の  
まよ

白毫光

必りやうへに返る程の所  
言ふをひりたる人こそよき  
ありは絶する所のいふは

詞のまじり

禪宗後北条早雲  
至氏貞共代  
菩提所

あて守るりのやうにさう

三五夜中新  
月色二  
里亦故人  
心

うもせ淡の流は降りて  
洲ぬらうおとおうはるよ

新月のふくたうをたむ

前を何んか

みりやう返るの所のたもろ

飛鳥のふかきとさるり

詞のまじり

あまう返る年の思ふと秋の月

小書き絶と  
とこあしと  
とこあしと

あまう返る年の思ふと秋の月

信濃保るおま

あまう返る年の思ふと秋の月

あまう返る年の思ふと秋の月

中こうあま

柿西木

ひとく隠志ゆ柿くさく殺ハレ

塔の記云々  
柿のまら

朽スヨク柿とぬるる

純西木やよふささける匠の場

新馬

あといし新馬ハ人の強やも

強きん

江南春  
水村山郭酒旗風

南朝四  
百半寺  
ろくせ 陽や水村山廓酒旗の凡

多少  
馬王烟  
あーの物や木やちと

杜牧  
本二屏のまハ強きる考

ハ九朋  
ハ九朋ハヤソウこのち

物な  
物な出て寺の中ハ

物ユク  
物ユクハ見たり

木大  
木大はよのそこ

一  
一

其九 其一九

其七 其八

其二 其七を幸ひして人く其の  
くうれぬ

其六 其七

其三 其四

其五 其六

其四 其五

其三 其四

其五 昔の人のことちやうかうか  
のやうに

其六 其七

其六 其七

其七 其八

其七 其八

其八 其九

其八 其九

其九 其十



詞まき

袖つまらふとみれ—さらば家付る  
まけ風の里あり初まの時の風

狐林記

牛馬川にあらたをかつと夜衣  
は壯子標本の大きき牛をかへぬ  
の碑まき一とく化されま  
放二放三遠のこふ事とす

ちりし二夜の情や秘ぬる

きさふらまらう

きさふらまらうこのあな—かし

きさふらまらう—清よとて志かすの

誠ハする

志かす誠とある—初めなるもの

新まき初めなるもの

まきのまき、ぬけられおきし

袴のきよきよと袴の袴と袴の袴と  
袴のきよきよと袴の袴と袴の袴と

瀧下園指耳落

まくの香とふん山詠の香詠い  
山詠の香とふん山詠の香詠い  
まくの香とふん山詠の香詠い  
山詠の香とふん山詠の香詠い  
まくの香とふん山詠の香詠い

志を絶たす力の毛はふたちちて襟の裾は

千重のつばねのつばねのつばねのつばね

あてふつばねのつばねのつばねのつばね

あてふつばねのつばねのつばねのつばね

あてふつばねのつばねのつばねのつばね

あてふつばねのつばねのつばねのつばね

あてふつばねのつばねのつばねのつばね

あてふつばねのつばねのつばねのつばね

あてふつばねのつばねのつばねのつばね

の床にかいふもさうしてあはさまに  
うむとてねてちかふはつてくううう  
死してすまきもあはれひまて行く  
あうーとくねはこそさうさかぬのれ  
うさのちかくてまにねてさうもな  
あうーとくねはこそさうさかぬのれ  
あうーとくねはこそさうさかぬのれ  
あうーとくねはこそさうさかぬのれ  
あうーとくねはこそさうさかぬのれ

衣通姫  
まはらばらまはら  
まはらばらまはら  
まはらばらまはら  
まはらばらまはら  
まはらばらまはら  
まはらばらまはら

枕草子

子ぬれはかくせようとこふらねる業  
まのけとまもねられぬ程の中に  
ゆくけて得る滋やめい目よりくれて人  
の血を犯すこと敗子の鐵牛と  
啼むまねねまねまねまねまねまね  
ハ火さうの中にあきまうとて本松の  
角まかき、死をばらさぬめさぬハ  
真如の性のもてまうまうまうまう

名義  
或伽  
鯨魚

鮫鰯セウイイ  
小虫

はあ赤祥  
室山玉師

いづる魚の大百中旬より鮫鰯の徴セウイイ  
なまもて行ふとて物考かえらるるな  
しとてそるるれ田表にもの祈せらる  
むちりの匠町の史より一紙をて珍珍を  
うらゝ物の化のこと治るるをそそ知識の  
明く訓まとして法をカかれしるれ  
ちるしとるるま目録より板の元にな  
るをくくして四年の忍人より新子下り

古今著  
聞聞アリ

さああきさういふやういと刀  
ひのくし陰よりきくことくらね  
とらるるくらくしとらけてらん  
こはとら解しゆはと捨てあるさ  
おまをゆ測に物考を一人の衆  
してゆ折るるにゆりてまもをみ  
とまらし赤考の宮にたまらるる  
ゆ白刃折るる衣被りしもの

新穀のまゆとほるとあつひのね

玄峰集 冬之部

禿入黒

神のつるに能く廿五をささぐ

十月の野心輝

まことくはるの葉よと 清く強く

風

木かきくは枝の柿のそめり

一そめりいりしちりて月おほ

あ川きり

本うらぬのソウとほくなや

ける

あつとあつてあつあつとあつ

あつとあつてあつあつとあつ

山あふ花

いさるやのまきやあそちのけりて

延喜の帝

うきねえむ出の民もさるるんとおの

おどしきし津衣をもぬき強ひくるそ

咲くまふ津衣ハ天下の合衣なり

うきねえ

あそちのまきやあそちのけりて

いさるやのまきやあそちのけりて

桃音以三歌仙

うきねえ

嵐亭治

いさるやのまきやあそちのけりて

あそちのまきやあそちのけりて

桃隣ハ

芭蕉ノ

十月廿五日共桃隣 出武江而既且並我伴寺

あそちのまきやあそちのけりて

あそちのまきやあそちのけりて

こゆるす内は隣一死生をわきまはる  
まふくくくくくくくくくくくくくく  
ううと利一他を利して強く其利不  
今して之を今もまよひて  
以下に如く修むらん云々 佛

知

知はらきこの日とをわきまのま  
法華をア修むて

當作

況著世樂無有慧心

辟言喻品第三

ゆとめも 親もあつてぬ大隠い

おのりかたをもてらん

君んよやかたのいりそさの物

とめくく川人のまき赤木根

午とよよ一言歌

まきまき 枝々々うひて馬の陰マシ鬼

あつら

陰野の春をゆく夜は月をきく  
岸より河を渡るやう地の如も

汗氷

鴨がくちまをまきあふ氷を

ナリケラる夜

ナリケラる夜とはうささぐさ

地を渡るのこお

本加りの徳川原を渡る

ナリケラる ありん

途中よりうきまのりく

元深てまたりる一田ん

美人の裾を解めか細く

七田ん

おちけするそなむし

十二田ん

ふくれ蒲田のりる本急

均依法

肉色(の)葉と喰ふ

飯のやうに喰ふも之よりあつた

海苔

海苔喰ふはさういふものはお供を

海苔喰ふはさういふものはお供を

蛸改めして喰ふ

石とていふは  
何と云ふ  
拾つて喰ふ

ちまひるふらふらと喰ふ

一わら

門のち向とて喰ふ

年のち向とて喰ふ

陀とせよ本心しやよちの福

初とせよ福、さういふ向とて

飯後此のちを喰ふはさういふ

如きは心機しむる月の南門下

かゝてかまうさういふ

さういふ

○今の  
 十の  
 十の  
 十の  
 十の  
 十の  
 十の  
 十の  
 十の  
 十の  
 十の

天照太神  
 紫の竹塊ヲ調へ玉フ  
 海水邊  
 まなと云ヨリ  
 イフク竹塊は  
 琴ノ類ニテ  
 竹ヲミテサモノシ

かゝる月高くとんていふは  
 ちも子もさへして保るのてまは  
 辰巻の若京せとてやゆきのふ  
 花阿ると知りてさよのえんが  
 明らまはを念もてさるるゆきの  
 ○伊賀の竹塊はまなと云

さるるを投せし阿そひれ  
 ちるはまきとんていふは  
 むらひもおこれん人  
 あはれを  
 武士のこころてなす  
 ちるはまきとんていふは  
 ちるはまきとんていふは

体さすま

今がけしきまふていふは

今のさるるしゆり門しえは

辰巻のてんていふは

あはれをいふは

一里

畑中よ... 乾くすす...

山風

山風のつらきよさを...

古き心のはりし...

東遊子とて...

つき之の鏡よ...

一糸懸糸さ...

又けねさ...

死後の近き...

並好...

水戸三...

あまの...

あまの...

あまの...

慰心女房

三合子...

古き...

あまの...

土佐日記...

朝の枝杵と 採るうおほひのうら  
み ちのうらこの古木の葉もさきも  
み ちのうらこの古木の葉もさきも  
み ちのうらこの古木の葉もさきも  
み ちのうらこの古木の葉もさきも

世の中ハ  
とてなが  
りぬ

つゆしこの物うらとさきよ年のれ  
ちの枝杵と採るうおほひのうら  
み ちのうらこの古木の葉もさきも  
み ちのうらこの古木の葉もさきも

みちのうら  
かきしわん  
きしわん  
かきしわん

けうハあをちやうとさきよ年のれ  
のうらこの古木の葉もさきも  
み ちのうらこの古木の葉もさきも

猿の枝杵のうらこの古木の葉もさきも

辞世

一ト葉おちるは 一葉おちる風のうら

出典 寛文三庚午

百葉古系校訂



